

空氣

野頭泰史

本阿弥書店

序にかへて

青き地球蚕は糸を吐きつづけ

空気
目次

序にかへて

1

春

7

夏

47

秋

109

冬

155

跋にかへて

195

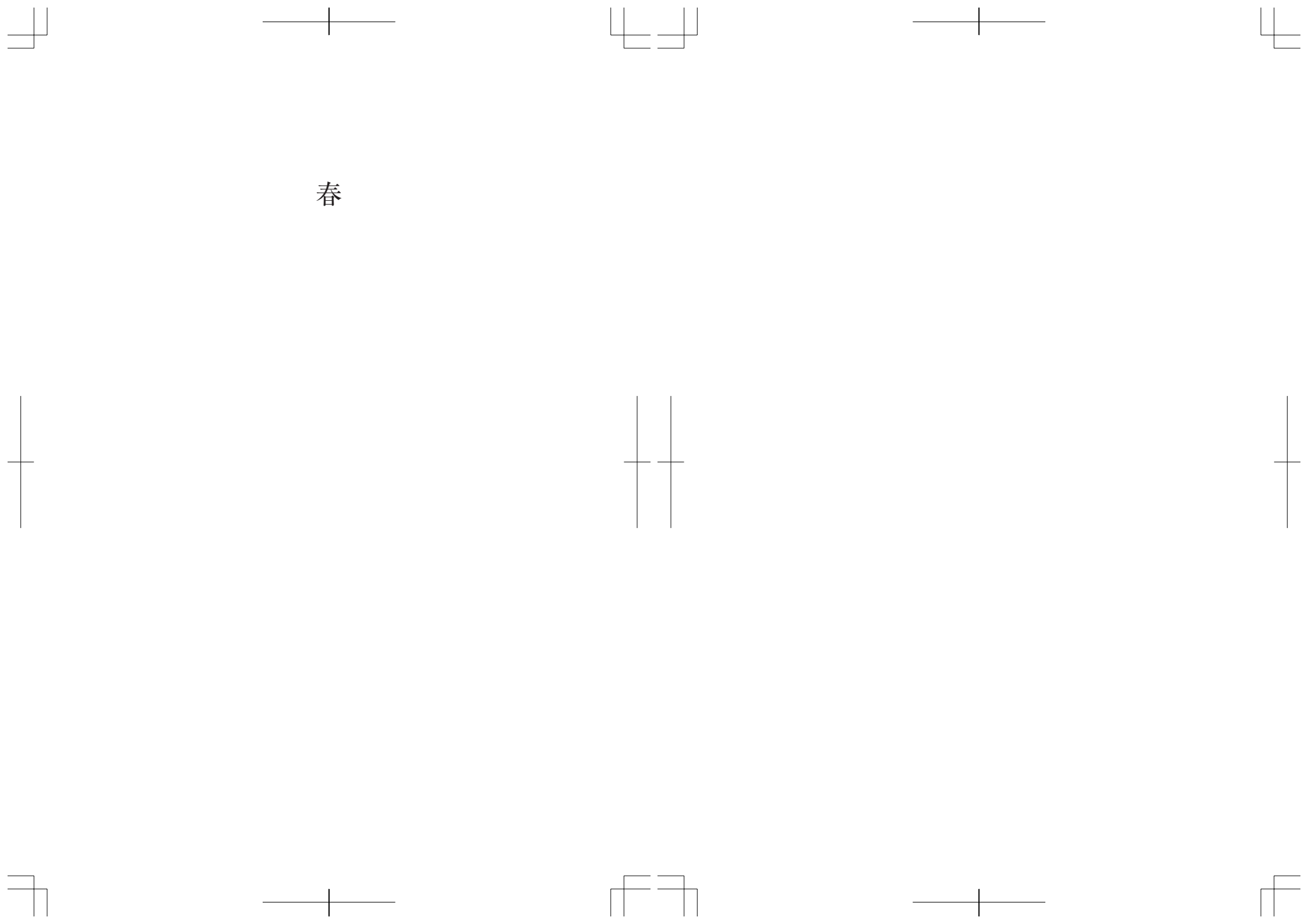
あとがき

196

句集
空
氣

野頭泰史

装幀
コスギ
ヤエ



春

亀の背観音の背寒明くる

チェーソー山から春の下りて来し

立春の馬全身で嘶けり

立春の棹持て行きぬ測量士

踏み固められし道あり二月尽

草萌や蛇行濁れる十勝川

山羊の目の赤らんでをり下萌ゆる

末黒野を一直線にオートバイ

ジャングルジム薄氷にある空間

薄氷や生けるものみな息ひそめ

白梅や大きく道の曲りをり

啓蟄や蛇口上向き下を向き

コペルニクス墓の軸足穴を出づ

地虫出づ隣人チリ人帰化したり

アスファルト敷き冷ましをり三月十日

曇り日の白湯いただきし涅槃寺

魚捌く老いし指先水温む

春一番胸ポケットに入れきれず

糴や隣国高度成長期

侃侃諤諤デフレインフレ蜷汁

手話語り形それぞれ雛の手

醤油の町幾時代もの雛かな

ぶらんこに軽く腰掛け白木蓮

ロンドン子みな足早や紫木蓮

連翹や象形文字を刻む石

両の手の蒲公英の絮時止まれ

雪解水海へ落とせり羅臼岳

札幌はビルの谷間の雪解川

綿雪を追って園児の舌の先

身をこなし入る鶉藪椿

龍天にフオークに絡めスパゲティ

人類は骨粗鬆症龍天に

蜷の道引きずって蜷歩みけり

オランウータン空に○描く日永かな

岩倉誠一先生（信濃追分在住）の受勲のお祝い

青
き
踏
む
師
の
懐
の
浅
間
山

鷹
鳩
と
化
し
団
塊
世
代
群
を
去
る

春
潮
へ
大
き
く
舵
を
回
し
け
り

春
潮
の
目
の
高
さ
ま
で
地
中
海

中世の路地に迷へり紫荊

バチカンへ人々人々木の芽風

ぶらんこや地球を周る宇宙船

ぶらんこや蹴り上げて富士遠かりき

鉄棒の一二三段風光る

膨張し渦巻く宇宙石鹼玉

桜咲く海だ海だと子ら叫ぶ

花満開いつせいに散るかくれんぼ

川波へ花迫りきて開きけり

夜桜や川一筋の銅色

軍艦のやうな雲来る花の山

浅草の空半分の花曇

桜 咲く 北へ 北へと 在来線

山 映り 人 映り 過ぐ 春の 川

熊 ん 蜂 教会の 鐘 鳴りに けり

蜂 蜂 蜂 が ゐ た ぞ と 牧師の子

乳牛の背中ごとつごつ紋白蝶

鶏の蹴散らしてゐる春の土

山羊繫ぐ紐の伸びゆく春日かな

自転車の空気を入れる春の雲

仏生会孔雀は羽を開きたる

嘗められて大地踏んばる仔馬かな

花びらの雨のベンチの二三片

チューリップ空へ空へと熱気球

菜の花や地球に落ちる宇宙船

まるまると水気を包み春キャベツ

リラの花冷えてビルへと勤め人

虫捕らふ子雀に腕なかりけり

等分にバウムクーヘン山笑ふ

沢^{さわ}渡^{わんじ}の山飾りなる藤の花

トニックを振つて春雷聞いてをり

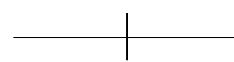
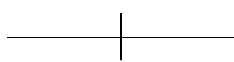
鋭角に父母の青春の夢

太陽の塔も太郎も陽炎へり

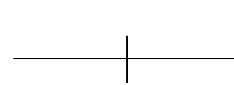
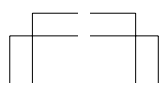
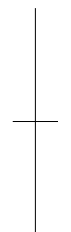
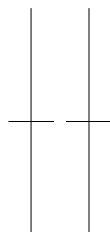
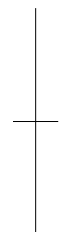
かぎろへる議事堂といふ箱モノ

丹田や八十八夜慎める

行く春やスクランブルの人の群れ



夏



本郷を下るハットや夏来る

夏来る波に手洗ふ九十九里

逃げられぬ鳥獣木魚夏に入る

馬の尻はち切れむばかり夏来る

真横から陽を浴びてゐる新樹かな

金環蝕芭蕉は玉を解きにけり

若楓水面の光散らしけり

鉄塔の下の明るしねぢり花

分け入つて五月の汗や武甲山

青天にゴツホのタッチ樟若葉

食
パ
ン
に
山
二
つ
あ
る
夏
鶯

老
鶯
や
黒
四
ダ
ム
に
肘
を
つ
く

袋
角
眼
差
し
遠
く
見
つ
め
を
り

虹
消
え
て
ゆ
く
と
き
人
の
歩
き
出
す

新島々ニセアカシヤの花現うつつ

新緑の壁突つ切つて神垣内

里若葉飯豊朝日は白き嶺

サラダボウル青葉若葉の外輪山

浅草寺裏から入る若葉かな

衛兵の腕直角に風薫る

青蘆の沼の上なる我孫子かな

植ゑ終へし水を引きゆく夏の鴨

源五郎女々しき男ばかり増え

滝壺を覗いてゐたる青大将

背と腹のどつちを握る初鰹

鰹喰ふ子規の笑顔を思ひけり

ヨーグルトたつぷり皿に更衣

牛乳を噛み砕きたる薄暑かな

原稿を吐き出すファックス明易し

射的屋にシート被せる夏の朝

まんまるの陽を遮れり青芭蕉

紀三井寺堂を浮かべて夏木立

鴨川の流れの強き祭かな

箱鮓や祇園の昼は暗かりき

高瀬川幅四間の五月闇

猫の尾の触覚のごと五月闇

山法師左山科右五条

義仲寺は一本裏手杜若

沢蟹と山門に立つ近江かな

田を植ゑて近江は水の静まれり

葭切や大きく撓む送電線

夏燕朝は空から来りけり

六 月 の 鏡 の ご と き 水 を 張 る

六 月 の 宿 縦 横 に 梁 柱

青 梅 の 樽 に つ ぎ つ ぎ 弾 む 音

酒 注 ぐ ま す ま す 梅 の 青 さ か な

一瞬の流線形や青田風

鷺つんと青田の風に吹かれけり

対峙して穂高焼岳梅雨に入る

音立てて千の地蔵のさみだるる

梅雨曇り左右に強く鯉の鰭

梅雨の鳩交む刹那の荒々し

蜘蛛すつと伊豆大島を掴みけり

蜘蛛の罅の中の高層ビルの群

女郎蜘蛛真赤な尻は天を向き

黙示録巨石の上のなめくぢり

体ごと角伸ばしをり蝸牛

雨上る修験の山の蝸牛

枇杷の実の窮屈に熟れ兜町

紫陽花の咲いて現在過去未来

三毛猫のぽつと明るき紫蘇畑

十坪ほどの暗がりであり紫蘇畑

ふうはりと黴の生まるる樽の中

蜻蛉生れそれぞれの宙ありにけり

大川を昇る舩や梅雨明けぬ

水郡線青水無月の只中を

蛸 捌 き 捌 い て は 投 げ 女 衆

砂 丘 動 き 浜 昼 顔 は 海 を 向 く

合 歡 の 花 島 の 少 年 野 球 団

く し や く し や に 萱 草 開 き 萎 み け り

二匹出て一匹戻る蟻の穴

羊水の宿す胎児や蟻の穴

見つめて見つめられし蟻地獄

尺蠖の宙を仰ぎて戻りけり

一対で売られてゐたり兜虫

ひよいと子が顔を突き出す兜虫

東日本大震災

兜虫瓦礫の山のブルドーザー

灌水の泥の中より兜虫

天 球 の 割 れ て 天 道 虫 交 る

天 道 虫 ぱ か つ と 割 れ て 飛 び ゆ け り

出 刃 包 丁 鱚 の 小 さ く な り に け り

あ あ で も な い か う で も な い と 辣 蕒 剥 く

全身で急ぐ毛虫や仁王像

初茄子一瞬止まる鋏の手

原爆死没者名簿の曝書かな

蟻が蟻運んでゐたり夏旱

朝曇り利根荒川も動かざる

象足を地に突き立てる溽暑かな

日盛の日本橋は道の下

日盛の二階でありし鶏の小屋

セメントを混ぜる二の腕日の盛

抱卵の鳩の見下ろす日向水

持ち上げて見上げてゐたる金魚かな

金魚玉ふつと時間の止まりけり

豆腐切る包丁大きな雲の峰

大道のパントマイムや雲の峰

大暑かなベンチにゴリラゐるごとし

象の鼻宙さまよへる大暑かな

昼寝覚め時と在処を失へり

暑にこもるテレビの画面だけ動き

声が声ふさいでゐたる蟬時雨

みんなの声の乱れや天守閣

熊谷の三十九度の油蟬

迫り来るボレロのリズム大西日

驟雨過ぎ石を噛みゐる鯉の口

魚河岸の人も車も夕立かな

なほ火照る多摩の横山夏の月

東入ル袋小路の夏の月

玉となり線香花火散るばかり

星々を過ぎる探査機海月揺れ

薔薇剪つて天牛虫の落ちにけり

夏深し麒麟の親子歩みけり

国道へ帽子飛ばされ土用波

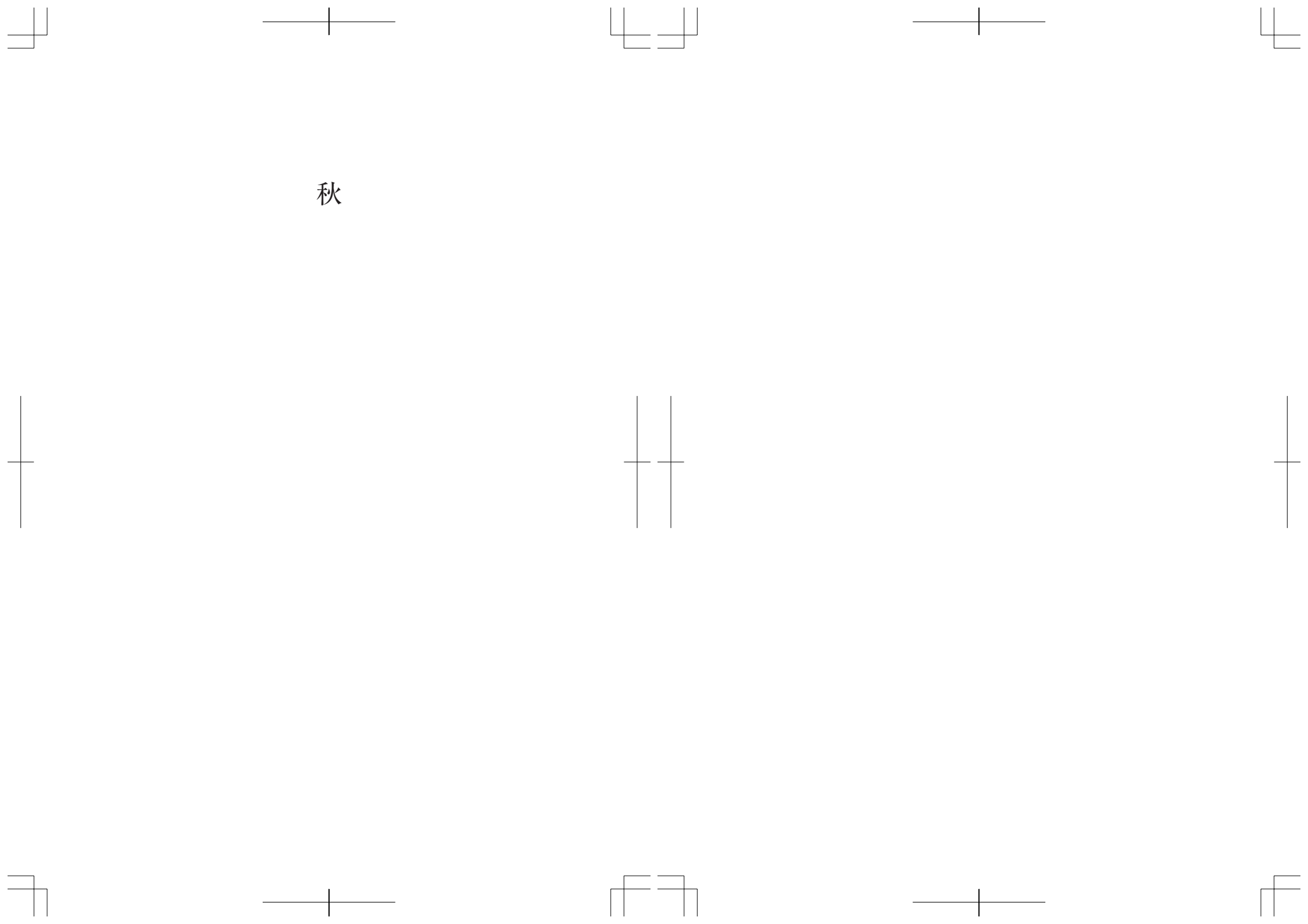
昆布干す太古の海を引き摺つて

ダイバーの吐き出すリング天使像

海^{うみんちゆ}人の皺の深さや晩夏光

岸壁の筭一本晩夏光

水を出て岸辺の家鴨晩夏光



秋

組板の凹みを削る今朝の秋

ぽんぽんと回しを叩く今朝の秋

秋立つや浮かんで深き鯉の口

新涼やするつと抜ける定期券

七夕の飾りに触れて肩車

七夕の竹ちりちりと乾きけり

帆船の帆を休めをり星祭

七夕やお多福豆の売られをり

東京のビル杭のごと天の川

蜩の点滴等しく落ちにけり

盂蘭盆やバイクの僧侶地図広ぐ

点の過去連なる過去や流燈会

踊の輪東京音頭に広がりぬ

下駄の先闇蹴つてゆく踊りかな

裏表縦横上下西瓜かな

切り売りの西瓜鋭くなりけり

敗戦を終戦日は雁^{がん}擬^{もど}き

道なりに消えゆく都電鳳仙花

野面とて住み分けはあり泡立草

仰向けに車背高泡立草

滝の音後ろへ落とし水引草

藪からし引いても引いても藪からし

地球儀を掴み損ねる竈馬かな

がちや／＼や二億光年先の星

かまきりの貌直角に回しけり

蝗の眼円く広がる地平線

蝻 螂 の 鞆 と とも に 運 ば る

ダ ン ベ ル や 蝻 螂 背 伸 び し て ゐ た り

鬼 や ん ま 躲 し て 越 ゆ る 峠 か な

蜻 蛉 飛 ぶ 脚 き つ ち り と 腹 に あ り

蜻蛉^と臀^{なめ} 咕^{なめ} 列車の風に乗りにけり

鵲 鴿 の S 字に走る水際かな

朝 靄 の 玉 蜀 黍 を 送 り 出 す

新宿やたうもろこしのごときビル

牛乳に広がるココア台風来

雌鶏の中の雄鶏台風来

ビルにビル映してゐたり野分あと

鹿島神宮

杉倒れ天へ抜けたる野分あと

考へるロダンの腕か甘藷

∞（無限大）を空に描きたる敬老日

頂を越えて押し寄す鰯雲

生き物の生まれる形鰯雲

天高し手も漕いでをり一輪車

疾走馬一塊に花野風

芋虫を土に叩いて雀かな

穴惑ひ戦艦大和を見に行かむ

人 去 っ て 人 の 気 配 や 秋 薔 薇

鶏 頭 花 コ ン ク リ ー ト に 亀 裂 入 る

旋 回 の 輪 を 重 ね ゆ く 帰 燕 か な

二 百 十 日 前 後 左 右 へ 猫 の 耳

初潮や神威岬へ道一本

満月の熊の迷へる真駒内

カステラを均等に切る良夜かな

コンビニの明かりの消えぬ良夜かな

アームストロング宇宙飛行士逝去

月に還る月を歩きし人なれば

東山魁夷展

秋天の心の道でありにけり

唐辛子策に広げる善光寺

骨董品包む新聞菊日和

烏賊を干す高さの向かう玄海灘

鉄板にほぐす秋味浜の昼

札幌の色なき風や碁盤割り

残る虫最上階のガラス張り

稲架かけて秩父は青き山の中

秋の雨山の信号黄から赤

○^{まる}
□^{しかく}
果ては△^{さんかく}
九月去ぬ

十月の顔のぶつかる鯉と亀

鬼瓦三尺離れ柿たわわ

吊るし柿親父の丸くなりけり

天空にぽつかりと穴雁渡る

石垣の石の不揃ひ雁渡る

十三夜隣も裏も独居人

黄落や余熱の残る石舞台

ハングル語交はしてゐたる松手入れ

モノクロのちゃんばら映画破蓮

橋いくつ潜つてセーヌ秋の空

カルチエラタン時押し流し秋の風

カルチエラタンⅡ六十年代の学生運動発端の地

ロダン美術館

地獄門崩れ散つたる秋の薔薇

モーツァルトの踏みしめし道銀杏散る

ハンガリー

狭霧消え動乱の丘重畳す

石畳どこまで続くプラハ秋

「プラハの春」の舞台となった広場にて

川霧の古都を二手に分かちけり

行く秋や川向かうから市の声

文化の日オランウータンと向き合へる

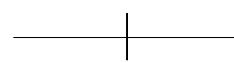
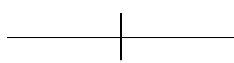
早稲田大学演劇博物館

銀杏散る面の大きな団十郎

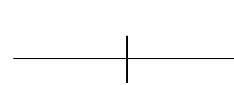
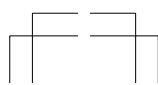
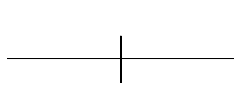
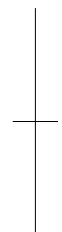
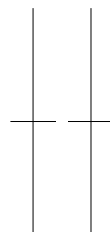
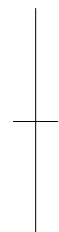
朝寒や鶉飛び立てる軍畑

青梅線軍畑駅

内股の犀の前足冬隣



冬



鳶争ひ遠州冬に入らんとす

象の目の奥の優しさ冬に入る

腐葉土に生きるものあり冬来る

枯蟪蛄空氣を縦に吸ひ込めり

鯉の背に亀乗り上げし神無月

羽衣か觔斗雲かな神の留守

鬣や十一月の柔らかさ

駅前
の十一月の駒ヶ岳

門の立て掛けてあり
十夜寺

バイエルの指のとどかぬ
七五三

落葉焚く新座野火止平林寺

落葉踏む後ろに音の残りけり

うつすらと力士の髭や冬ぬくし

豹の兎を授かりし園冬ぬくし

身の丈にゆつくり咲けり冬薔薇

冬薔薇背筋ゆつくり伸ばしけり

浮寝鳥囲んでゐたり浮御堂

何もしない晴れた日の午後冬の蝶

朝霜や牛の形で晒す草

石を打つ象の叫びや冬晴るる

江田島を遠巻きにして牡蠣筏

牡蠣筏海は空まで青かりき

冬至南瓜地球の裏から船に乗り

大根干す宇宙の塵の落ちる夜

緞帳の綱張つてゐる十二月

轟音を見上げてゐたる十二月

十二月豆腐にあばたありにけり

ひとつ所象の足踏み年歩む

ドラクロアの雲が来寄るぞ冬鷗

底冷えの声のとがるや魚市場

綿虫やどこへどこから市の空

冬空のこはれて能登の黒瓦

I Tに頼り急かさる漱石忌

裏山の見えて見えざる三十三才

呉師走海軍服とジーンズと

緑青の大和砲口冬の海

展宏先生三回忌 生前小淵沢駅でお見かけする

甲斐駒を仰ぐ 佛山眠る

冬の日に狭山ヶ丘は陰日向

大根も盃もあり年の市

写真入の名札ぶら下げ年暮るる

千年の戸を開けてをり初日の出

初鶏の伸びきつてゐる頭かな

二千年快晴と記す初日記

大仏の耳朶の霜焼二千年

東京に新島生まれお正月

お正月顔いつぱいのハンバーガー

ライダーの背中角張る初筑波

宙を浮くごとく拍子木初芝居

校倉の弛みなかりし寒の入

寒晴や背筋を伸ばし校門へ

大寒や呪文のごとく糶の声

陸揚げの鮪に数字印しけり

きらきらと星を閉ぢ込め土凍てる

土凍てて子犬の腹の柔らかき

風凍てて杉の大木圧し合ふ

寒林の空すつぽりと抜けにけり

枯野走る少年の腕直角に

十字架の影の歪みや芝枯るる

雪吊の雪の中より紅い花

薨より雪せり出せる永平寺

自販機のがチャンと落とす冬の月

ブロッコリブロッコリの固まつて

海鼠切るケーキを切ったその腕で

海鼠割くまこと小さき齒並びけり

煮凝や伊万里の皿にちんまりと

黒光る床の冷たき武者溜り

駝鳥にも五臓六腑や空ッ風

合流の水の澄みゆく川普請

青々と畝深々と矢切葱

うらうらと影の飛びゐる冬菜畑

探梅や金平糖を口に入れ

本流を支流にそれて冬桜

冬帽子パリには白がよく似合ふ

井上有一の書

貧の字の歩き出すごと四温かな

跋にかへて

横
の
空
気
縦
の
空
気
や
十
二
月

あとがき——私の俳句が目指すもの

“生きている世界よりもことばにした世界の方が美しい” ことがある。美しいとは、単に綺麗だということではない。今までなかった、よくぞ言った、はつとさせられた、いきいきしている、だから美しいということだってある。対象をあらゆる角度から見ると。表面だけでなく内面も見ると。そうすることで対象の本質を捉える。そして、その本質をことばにする。

私は、“生きている世界よりもことばにした世界の方が美しい” といえる俳句を紡ぎ出していきたい。

*

平成八年一月、「紹」の早野和子氏の紹介で紹の句会「砂の会」に参加し、

作句を始めて早いもので十八年になる。一区切りとして、これまでの句三百五十四句を句集としてまとめた。

句集名『空気』は、〈横の空気縦の空気や十二月〉からとった。この句は、「紹」の本句会で、私の俳句の師である三人、すなわち「紹」前代表の川崎展宏氏、「紹」代表の星野恒彦氏、「砂の会」の須原和男氏が、揃って選句してくださった思い出深い句である。

「砂の会」に参加して一年余り経った頃、同人の句集の祝賀会の後、展宏先生と数人で中野に立ち寄った。その折、展宏先生が突然私たちに向かって、「君達は俳人か」と発せられた。口ごもる我々を見るその目は鋭く、私は、その迫力に圧倒された。これからも、この時に受けた衝撃を忘れずに作句を続けたい。

星野恒彦氏には、自選した句を監修の上、帯文まで書いていただいた。あらためて、心からお礼申し上げます。

出版にあたっては本阿弥書店の田中利夫様、安田まどか様にお世話になりました。お礼申し上げます。

平成二十六年一月

野頭 泰史

著者略歴

野頭泰史（のづ・やすし）

昭和23年（1948）5月 神奈川県厚木市に生まれる
昭和42年（1967）3月 県立厚木高等学校卒業
昭和46年（1971）3月 早稲田大学第一政治経済学部経済学科卒業
平成8年（1996）1月 「貂」砂の会に参加
平成11年（1999）4月 「貂」本句会に参加
平成12年（2000）5月 「貂」同人

現住所 〒191-0032
東京都日野市三沢5丁目18番地の5

句集 空 気

2014年2月22日 発行

定 価：本体2800円（税別）

著 者 野頭 泰史

発行者 本阿弥秀雄

発行所 本阿弥書店

東京都千代田区猿楽町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068(代) 振替 00100-5-164430

印刷・製本 三和印刷

ISBN978-4-7768-1063-6 (2785) Printed in Japan

© Nozu Yasushi 2014

空氣

野頭泰史

本阿弥書店